

本研究では、近年教育現場を悩ます課題として挙げられている新指導要領の導入と旧課程を受けている現三年生(2023年度時点)との比較を通じて、双方の利点、欠点や学生目線でのその是非について考察をしたものである。旧課程と新課程それぞれが課題を抱えおり、大学での研究のみにとどまらず、教育現場においても日々試行錯誤が繰り返されている問題、特に主体性について、学生視点においての最適解と呼べるものを提案しようと思う。

キーワード：教育 新教育課程

I. はじめに

現在、私は三年生として授業を受けているが、その成績の付け方は従来の旧課程のものであり、その性質上、部活動だけに専念しているようでは、優秀な成績を収めることは到底かなわない。

現状この仙台三高には約 960 名が在籍し、その多くが仙台一高や二高にはない文武両道の理念に憧れて入学した者が多く、この学び舎の中で日々勉学に励む姿をよく目にするが、その一方、部活動との両立が難しいと考えている生徒が多いのもまた現状で、実際私達が行った事前研究で取ったアンケートには遅くまで練習が続く運動部の生徒からは、

- ・毎日課題に追われる
- ・自主学习など手に付かない

という声多く寄せられ、実際に勉強を優先して部活を辞める事態が三年生内で多発している。

そこで、私達は自身に適用されている旧課程ないし、後輩の代から施行されている新教育課程が果たして現在の多忙な高校生にとって相応しいものなのか、またより良い方法がないか考察を深めてきた。

II. それぞれの教育課程について

i) 旧課程

現在の三年生まで使用されていたこの旧課程は単純な仕組みのもので、いかに定期テストで高得点を取れるかどうかにかかっている。

まず、計 4 回に渡る定期テストの平均点に 0.8 を掛け、そこから平常点 20 点を加えて算出するもので、評定で 5 を取りたいのであれば、まず過酷なテスト勉強は避けて通れない。加え、普

段からの予習復習はもちろんのこと、授業での課題を出す必要が迫られる。

現状、それをかなりの高水準でこなし、良好な成績を収めている生徒もいるわけだが、そのハードルの高さは運動部に配慮されたものでないものは明白であり、両立掲げる一方、どちらも中途半端な形になってしまっている生徒が多いのも 1 つの事実として存在する。

このような仕組みを導入した意図として考えられるのは、良い成績を捻出するのがあまりにも容易である場合、大学入試における推薦入試の特性が弱まってしまう恐れがある。しかし、推薦入試における平均評定は出願資格としての利用に留まることも多々あり、実際の可否については、その場での小論文や面接、調査書についてはその他の資格等が重視されているため、出願数が多くなることよりもあまりにも過酷な成績の付け方に、生徒の負担が多くなってきていることの方が問題視すべきものである。

ii) 新課程

まるで痒い所に手が届くように現れたこの新課程によって評定は驚くほどに容易に高いものが出せるようになってしまった。

その要因として、旧課程からは一新したその算出方法によるものである。この方式では現在の中学校で利用されているものに近似しており、生徒は定期テストの点数に限らず、普段の授業態度まで細かく分類され、最終的に 3 つの大枠に統合、それぞれにアルファベット順に良い方から A、B、C と付けられ、その数で評定は算出される。この方式により実質赤点という概

念が消え去ったことになる。仮にテストの点数が 20 点を切ったとしても、3 つの評価項目における A の取得の難易度への影響が旧過程よりも少なく、加えその他の項目での補強は容易であるため、事実出席してある程度の授業態度が備わっていれば、テストの成績に関係なく評定 4 をもらっている生徒が多いと見受けられる。

そして、新課程では特に生徒の積極性及び自主性を高く評価することが明言されており、実

際に 3 つある内の 1 つはそのような主体性に重きを置いた項目が設けられ、単純計算で考えれば、旧過程においての主体性にあたる関心、意欲、態度の割合が全体の 2 割と比べ、実に 3 割 3 分とその比重の違い分かる。

Ⅲ.探究内容

元々この2つが混在している状況以上に現在の教育現場ではこの新課程への早急な対応が求められている。それはもっともなことで、これまでなら良くも悪くも定期テストさえ準備すれば済んだ成績処理が、テストへの比重が減った分の授業内の評価材料を増やしていくことが必要とされている。テストというひとつ簡単な判断材料が失われたこと以上に、これまでよりも重きを増した主体性を計ることが特に教育者の悩みの種になっている。

実際、それぞれの教科毎に主体性のあり方が全く別物であり、なおかつ更に細かい定義は各現場に一任され、その問題はより一層困難を極めている。これでは大学入試に使われる判断材料としては、その公平さに欠けるものとして生徒自身の視点から見ても、新課程は矛盾を孕んでいると思われても仕方が無い。

そこで我々は新たに評価の付け方を考え直すこととして、最初に改めて主体性というものを定義し直す所から始めた。まず第1に旧過程では関心意欲態度に分類されていたが、関心については計りようがなく、態度に関しては、授業を受ける学生としての振る舞いでないのであれば、単なる評価の上での減点としてではなく生徒指導等に回すのが得策である。つまり、単に授業の妨げになっていないのであれば、そこは割り切って目をつぶるのが好ましい。そこで、我々が重視するのは授業以外での学習への取り組み言い換えれば、意欲の部分である。これは生徒の授業への意欲ではなく、いかに授業以外での家庭学習を通してその教科への学習に取り組んでいるかを評価するのだ。ここで注意しておきたいのは、学校側が課題を出すわけではないことだ。あくまで生徒自身が能動的、いや主体的に学習することが大事なのだ。

この方法のメリットとしては、生徒自身が授業内で感じた不足を補う時間が用意されることだ。加えそれが評価の対象となるため、1日の学習の復習としても効果的であり、多忙な部活生にとっても部活の妨げになりにくいものになる。

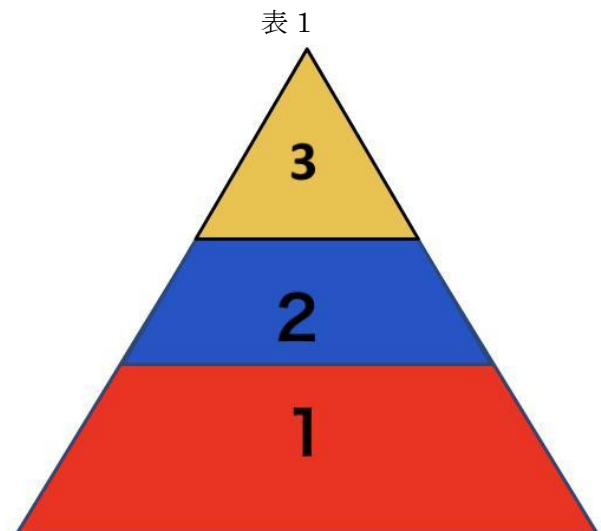
次に、先の主体性を計る方式を加えた新たな評価方法について提案しようと思う。まず、大枠としては新課程で採用されている3つの項目

で評価するのが好ましいと考える。旧過程のままでは、そもそもの生徒への負担の増加が避けられないためである。そして、新たに評価項目を設置し、

- 1 生徒が学習したことを確実に定着されているか
- 2 学習の成果を発展的に応用して使えるか
- 3 課題以外で取り組む能動的な学習を行っているか

の3つを定めた。1はこれまでの定期テストを用いた単純な学習能力についての評価。2は授業内での独自の取り組みとして基礎知識を応用する能力、3は先に述べた家庭学習によるものだ。この他にこの3つの項目のそれぞれの割合を決め

1:50% 2:25% 3:25%
とした。(表1)



更に、新課程のようなアルファベットで評価するのではなく、旧過程のように各項目に点数で作れることにし、80点以上が5、65点以上が4...と言うようにする。この理由としては定期テストの重要性というものを残しておく必要があったためである。いくら部活熱心な生徒でも一切勉強しないというのは学生の本分か逸脱しており、定期的なテストの機会を設けないと学習に取り組まなくなってしまうからだ。またこの他に主体的な思考力を高める上での必要性が挙げられる。確かに、生徒自身が言われたこと以外で自分から何かに取り組むという姿勢は今後の社会に出る人材としては、ごもっともな能力ではあるが、近年、教育現場での主体性の解釈の違いから、思考力ばかり鍛えていてそも

その考えの元となる知識の低下が見受けられる。実際、私自身が授業を受けている中で、英語での例を挙げるのであれば、学年の模試の成績が全体的に英作文が非常良い成果を上げている反面、その他の文法問題が一向に取れていないという話をよく聞く。また国語科でも、同様に漢字やそもそもの語彙が足りてないと言う。これが今後の社会の出る人材として増加し続ければ、この国の経済成長は見込めないという意見も出てきて然りだと思われる。

このようにまず我々の構想としては、近年、重要視されている主体性を育む上で、まず確実な知識という基盤を作るような構成が望ましいと考える。そして、近年の傾向通り主体性に重点を置き、先の項目各の割合を

1:50% 2:20% 3:30%

とした。同様に評定も 70 点以上を 5 とするように変更した。この意図としては、生徒目線で考えた時、そもそもの地頭に自信があり、この自主学习をしたがらない生徒もいる。教師からすれば、実際論外ではあるが、実際に優秀なのであれば、そのような人材がたかが高校の成績でその道を閉ざされるのは社会的にはデメリットとなるため、自主学习をしなくても本当に成績優秀であれば、評定 5 は得られるような仕組みになっている。反対にそこまで学力に自信のない生徒であっても、自らの頑張りでテストの点数を補え、能動的に学習している以上、成績だって間違いなく上がる。

IV.考察

この新方式は、生徒目線で考えた時、そもそもの地頭に自信があり、この自主学习をしたがらない生徒もいる。教師からすれば、実際論外ではあるが、実際に優秀なのであれば、そのような人材がたかが高校の成績でその道を閉ざされるのは社会的にはデメリットとなるため、自主学习をしなくても本当に成績優秀であれば、評定 5 は得られるような仕組みになっている。反対にそこまで学力に自信のない生徒であっても、自らの頑張りでテストの点数を補え、能動的に学習している以上、成績だって間違いなく上がるが見込める。

V.まとめ

以上の事から私達はこのような新たな評価方法を提案するまでに至った。これらの導入により、教育現場での教師、生徒両方の負担が改善されるかつ、より教育理念にそった教育を行えることが期待される。いつか、この方法のおかげで低迷した日本社会に新たな風を起こす人材が現れるのであれば、幸いである。

参考文献

教育は何を評価してきたのか 本田由紀
複雑化の教育論 内田樹